

# 長崎大学・川内村復興推進拠点における 放射線看護の国際的な発信に向けた活動

## Activities for international dissemination of radiation nursing at Nagasaki Univ./Kawauchi Village Reconstruction Promotion Base

折田 真紀子 平良 文亨 高村 昇

Makiko ORITA Yasuyuki TAIRA Noboru TAKAMURA

長崎大学原爆後障害医療研究所 国際保健医療福祉学研究分野

Department of Global Health, Medicine and Welfare, Atomic Bomb Disease Institute, Nagasaki University

---

2011年の福島第一原子力発電所事故後の復興、さらには将来の予期せぬ放射線災害に備えるために、国内外の保健師・看護師の連携と情報の共有が重要である。長崎大学は、2013年に事故の影響を受けた福島県双葉郡川内村と包括連携協定を締結し、同村の帰還と新しい村づくりを支援する活動を継続すると同時に、国内外の専門家、特に被ばく医療学に精通した保健師・看護師の育成に携わっている。2017年と2018年には、2016年に設立された長崎大学・福島県立医科大学共同大学院災害・被ばく医療学共同専攻の留学生の実習を川内村で行い、環境放射能評価や放射線リスクコミュニケーションの実際について学ぶ場を提供した。また2018年には、韓国原子力医学院（KIRAMS）の国立緊急被ばくセンターで働く看護師を対象に、福島第一原発事故からの復興状況や放射線防護・線量管理の実際を通じた被ばく医療学に関する研修を行った。また、長崎大学では教員や学生が国際機関や国外の関係機関において川内村での活動について紹介してきた。今回の発表では、演者が2014年と2015年に国際原子力機関（IAEA）、2016年にはカナダ原子力安全委員会（Canadian Nuclear Safety Commission）において川内村における放射線健康リスクコミュニケーション活動について紹介したことが報告された。発表後の討論では、国際学会での発表の後によく聞かれた質問はなにか、今後の福島復興に向けてどのようなリスクコミュニケーション活動が求められているか等について質問が聞かれ、活発な意見交換となった。保健師・看護師は日ごろから、住民と接し、相手の気持ちに寄り添った支援を考えることができ、原子力災害時における役割は大きいと考えられる。今後も川内村の復興推進拠点を基盤として人材育成に向けた研修や関係機関への情報発信を通じた被ばく医療学分野における保健師・看護師の役割についての情報共有を、国内外の関係機関と行いたいと考えている。この度このような貴重な機会を与えていただき、大会長をはじめ関係者の皆様に感謝したい。